

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

『近江日野の歴史』第八巻「史料編」は、「古代・中世編」、「近世編」、「近現代編」からなります。付録CD-ROMには七五三の史料を掲載しています。役場・公民館等にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。

今回は、『近江日野の歴史』編さんのために収集した史料から、日野の著名な合薬業者である正野玄三家に残された海外情勢を伝える手紙について紹介します。

## 合薬業者と長崎貿易

日野商人の取り扱った品物は多岐に及びますが、その中でも主力商品といえるもののひとつが合薬であったことはご存じの方も多いかと思えます。

合薬とは、読んで字のごとく、いくつもの材料(薬種)を組み合わせてつくられる薬です。ですから、合薬業者は常にいろいろな材料を安定的に仕入れ続ける必要があったわけですね。ところで、合薬販売を営む商人たちはどこからこの合薬の材料を仕入れていたのでしょうか。当時の薬といえばいわゆる漢方薬で、国内では手に入りやすい材料もありました。したがって、

彼ら合薬業者には海外からの輸入品に頼らざるをえない事情がつきまとったのです。

さて、江戸時代における海外貿易の窓口のひとつは長崎でした。当時、長崎の出島ではオランダ人や中国人が運んできた輸入品が取り引きされていました。そして輸入品を買い付けた商人は京都や大坂の仲買人(薬種商)へ商品を卸し、そこから全国の取り引き合薬業者へ商品の入荷を知らせ、注文をつのるという流れが大勢を占めました。日野で合薬業を営んでいたお宅には、貿易船の到着や商品の相場などを知らせるとともに注文をうながす貿易商人からの手紙が現在も残されていることがあります。このようにして日野の合薬業者は輸入材料を手に入れました。

今回紹介する史料はこうした商人からの手紙の一通です。

## 手紙が伝える海外情勢

長崎の輸入品を扱う商人の池田屋治兵衛は、どういった経緯からかは不明ながら、中国人船主がもたらした不穏な情報を入手します。それは中国国内での反乱の情報でした。情報をつかんだ彼は日野に手紙で知らせました。

手紙によると、洪秀全・楊秀清という人物を中心として中国各地の無頼の者が集まり、略奪行為を行っているとのこと。頭に赤い木綿布を巻いていることから現地では「紅巾賊」「長髮賊」などと通称されている彼らが役所や城郭にまで押し入り、多数の死傷者がでてい、とあります。他には、ついに中国政府と全面衝突するに及んで賊徒が難攻不落の南京にたてこもったこと、賊徒は上海に滞在しているイギリス人と交流をもっていらしいこと、なども記されています。また、この情報をもたら

した人物が中国を出帆する時点では中国政府と賊徒の戦闘は続行中で勝敗はわからない、ともありません。

さて、なぜ池田屋治兵衛はこのような情報を伝えたのでしょうか。それはおそらく先に述べたような合薬業者独特の事情によるのではないのでしょうか。中国は合薬の材料の生産国であり、それは中国人によって日本に運ばれていました。その中国が混乱状態にあるということは、少なからず合薬の材料の仕入れに影響を与えるでしょう。材料の入手がおぼつかなくなるとは合薬業者としては死活問題です。合薬業者がいち早くこの重大事を知り、しかるべき手を打つことができるようにと考えて池田屋治兵衛はこの手紙を送ったのではないのでしょうか。

池田屋治兵衛が伝えたこの内乱は、現在「太平天国の乱」と呼ばれ、教科書にも載っているほどの大事件でした。この史料からは中国から遠く離れた日野にもこのような形で事件の影響が及んでいたことがわかるとともに、日野商人の情報ネットワークの一端がかいま見えてきます。